ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「オーダイル！」

「行け！　タテトプス！」

　二人は同時にボールを投げた。中から出てきたのは、良助はお馴染みのオーダイル。拓馬は四足歩行の小柄な、顔面が大きな銀色の盾で覆われているポケモンを出した。『シールドポケモン』タテトプスである。

　出るや否や、二匹は相手に向かって走り出す。

「先手必勝！　オーダイル、切り裂く！」

「ドラピオン、右によけて！」

　上から振り下ろされたオーダイルの腕は空を切る。

　来夢音は一瞬、オーダイルの倒れる姿を想像した。横に躱したドラピオンは攻撃体勢に入っており、攻撃を外したオーダイルには大きな隙がある。攻撃が決まれば、オーダイルに大ダメージを与えられるだろう。

　勝った。そう来夢音は思った。だが突如――

「お嬢様！　ドラピオン！　いけません！」

　そう叫ぶ白の声が聞こえた時には、もう遅い。

来夢音は見た。

空振りしたはずのオーダイルの腕が、タテトプスの顔面の盾に当たって止まっていることに。

　そして、タテトプスの盾が白い光に包まれた。拓馬の人差し指が、ドラピオンに向けられる。

「メタルバースト！」

　刹那、白い光が弾け飛び、ドラピオンに襲いかかった。

　だが、攻撃がダイレクトにドラピオンにヒットすることは無かった。

　白のプララが、攻撃とドラピオンとの間に割って入ったからだ。

　攻撃に対して背を向け、ドラピオンを庇うような形で攻撃を受ける。だが、次々と押し寄せる光の攻撃を全ては受けきれない。加えて小さな体のプララでは、体の大きいドラピオンを守り切れるはずもなく、プララの頭上から滲み出る攻撃をドラピオンも食らっていた。それを何とかしたいプララではあったのだが、攻撃に吹っ飛ばされないようにするので、そこまで手を回す余裕は無い。

「プララっ？」

　それでもプララは、それに甘んじてはいなかった。吹っ飛ばされる覚悟で、両腕をドラピオンの前に出し、そっちに集中する。既に白からは指示は受けていたのだ。

　そして弾丸のように飛ばされた瞬間、プララの両腕から白いエネルギーのようなものがドラピオンの方に流れる。さっきも使った『手助け』という技である。ポケモンの技の威力を上げる技である。

　『手助け』を受けたドラピオンは、攻撃を受けつつも、それを気にすることなく突き進む。その先にはタテトプス。だが――

「あぶない！　よけてぇっ！」

　攻撃体勢に入るために両腕を上に振り上げたドラピオンだったが、その瞬間後ろからとてつもない衝撃を感じた。

　主人の警告の声が耳に入ったのは、そのすぐ後だ。

「ドラピオンっ？」

　来夢音は目を見開いていた。ドラピオンの背後から攻撃を仕掛けたのは当然オーダイル。さっきは空振りに終わった『切り裂く』の技は、今度は確実にドラピオンに命中していたのだ。

　だが、来夢音が驚いたのはそこでは無い。オーダイルの攻撃の直線上には、タテトプスがいたのだ。ドラピオンが攻撃を躱したら、確実に味方のタテトプスに攻撃が当たっていただろう。

　それ以前に、オーダイルは無傷では無かった。ドラピオンの背後に回ったのだから当然、光の攻撃はオーダイルも受けていた。プララとドラピオンが盾になっていたため、そこまで大ダメージは受けていないが、それでも来夢音には信じられない事だ。

　まあ当然、良助もオーダイルもそこら辺の事は分かっているつもりではあるのだが……まあ、それよりも。

　『メタルバースト』という技は、簡単に言えば、受けた攻撃を同威力で相手に跳ね返す技である。普段拓馬がこの技を指示する時は、戦っている相手のポケモンの攻撃に合わせるのだが、今回は味方である良助の攻撃に合わせた。

　ただし、この『合わせた』の意味は、マルチバトルでの『合わせた』の意味合いとは少し違う。

白と来夢音のコンビネーションを見て、とてもあんなことは自分達には出来ないと思った拓馬と良助ではあるが、それでも確実に自分達の方が優っていると自信を持って言えるところがある。

　それはシングルバトル。

　オーダイルとタテトプスを出した瞬間、二人は互いが味方同士であることを一瞬だけ忘れることにしたのだ。

さっきまでの二人は、慣れないマルチバトルなのにも関わらず、即興でコンビネーションを組もうとしていた。並のポケモントレーナー相手であれば、この二人ならそれなりの強さを見せつけたことだろう。

だが、今の相手は違う。即席の、付け焼刃の戦術で勝てるような相手では無い。ならばいっそ、自分達の得意な方に持っていく方がいい。そう考えたのである。

ちなみにさっきはシングルバトルと言ったが、正確にはシングル『での』バトルだ。今二人の感覚は、『白・来夢音　対　拓馬・良助』ではなく、『白・来夢音・拓馬　対　良助』あるいは『白・来夢音・良助　対　拓馬』というような風になっていた。これなら拓馬と良助は、普段通りの感覚で戦えるのである。マルチバトルの経験は無くとも、野生のポケモン相手とは言え、多対一の経験はそれなりにあるからだ。

そして多対一の時での鉄則は、『リーダー格の奴を最初に倒す』事である。今回はその『リーダー格の奴』が二人になっただけ。これならいつもやっていることとほとんど変わらない。

そして拓馬からすれば、この『メタルバースト』の反射攻撃は、いつも通り『敵であるオーダイルの攻撃』を『同じく敵であるドラピオンの方』に向けた。ただそれだけのことなのだ。良助もまた、『敵であるタテトプスの反撃』を『同じく敵であるプララとドラピオン』を盾にして、『敵であるタテトプスとドラピオンに纏めて攻撃した』だけ。

これは決して、『コンビネーション』などと呼べるものではない。

それでも、白と来夢音には効果は抜群だった。白は勿論のこと、シングルバトルはそれなりに出来る来夢音でさえも、良助達が考えているような『多対一の戦闘』についての経験は全く無い。

いや白はお嬢様を守る執事なので、当然そんな状況もありえない話では無いが、それに対応する訓練を受けるのはもっと先の話である。

「ド……ドラピオン、お疲れ様！」

「プララ、ゆっくり休んでいて下さい！」

　こうして来夢音と白が、気絶した二匹をボールに戻す中、

「よっし！　これで……」

「まだ勝負は分からないね！」

　良助と拓馬はそう言って、ニッと笑った。